

JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

September 30, 2016 No.7

JACET 関東支部ニューズレター第7号 (WEB版) 刊行に寄せて

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB版第7号) をお届けいたします。関東支部副支部長であり関東支部ニューズレター委員会委員長の佐野富士子先生 (常葉大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) を初めとする委員会の先生方の不断のご尽力に衷心より御礼申し上げます。委員長と副委員長を核とする委員会の先生方と関東支部を支え運営して下さる多くの先生方の献身的なご支援とチームワークがあってこそその成果に他なりません。紙面をもって、改めて御礼申し上げます次第です。

2013年度より、学術研究発表は、「関東支部紀要」(JACET-KANTO Journal) に掲載し、活動報告等は、本「ニューズレター (WEB版)」(9月と3月の年2回刊行) に掲載しております。それぞれが独立した存在として機能する一方で、学会本体を支える車の両輪のような相互補完的な役割を有しております。拝読いただき、ご批判と

ご指導を頂ければ幸甚です。

2016年度 JACET 関東支部大会は、2016年7月3日 (日) 早稲田大学 (早稲田キャンパス) にて、「Exploring the Potential of CLIL Beyond Europe (ヨーロッパの域を超えた CLIL の可能性を求めて)」を大会テーマとして開催されました。日曜日にも拘わらず300名を超える参加者を得て無事終了することができました。大会委員長の新井巧磨先生 (早稲田大学) と大会実行委員長の山口高領先生 (早稲田大学) を核にした大会運営委員会の先生方にまずもって衷心より御礼申し上げます。また10周年を記念して CLIL の研究者として名高い Dr. Margaret Gearon と Dr. Russell Cross (Melbourne Graduate School of Education) を招聘し、基調講演とワークショップを行い深い学びの機会を得ることができました。コーディネーターとして、またワークショップを企画し運営して下さった関東支部副支部長

目次

・ 巻頭言 支部長 木村松雄	- 1 -	・ 青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会報告 支部研究企画委員 辻るりこ 支部研究企画委員 米山明日香	-15-
・ 第10回関東支部大会報告 支部大会運営委員長 新井巧磨	- 2 -	・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ 支部紀要編集委員長 伊東弥香	-17-
・ 第1回支部総会報告 支部事務局幹事 高木亜希子	-11-	・ 事務局だより 支部事務局幹事 高木亜希子	-17-
・ 月例研究会報告 月例研究委員会委員長 山本成代 月例研究委員会副委員長 河内山晶子	-13-		

の笹島茂先生（東洋英和女学院大学）と日本の立場で CLIL の実践を紹介して下さった伊東弥香先生（東海大学）には大変お世話になりました。ここに衷心より御礼を申し上げます。

全体シンポジウムは、10 周年を記念して、「大学英語教育の現状と課題（Current Condition and Challenges For English Education in Universities）」と題し、寺内一先生（JACET 会長・高千穂大学）、田地野彰先生（京都大学）、村田久美子先生（早稲田大学）のお三方にそれぞれの専門分野から大学英語教育の現状分析と未来に向かうための課題についてご提案頂きました。誠に有難うございました。大会終了後開催した懇親会は全員が英語を使い忘れ得ぬ楽しい思い出となりました。海外からのゲストも満足して帰国されたと思います。

前日の準備、そして朝早くから大会開催のために裏方として惜しみなくご尽力下さった高木亜希子先生（青山学院大学）、奥切恵先生（聖心女子大学）、辻りこ先生（神田外語大学）を初め、多くの先生方のご尽力に対し衷心より御礼申し上げます。次第です。

2017 年度 JACET 国際大会（8 月 29 日・30 日・31 日）は青山学院大学にて開催されます。本部との共同体制により関東支部が担当致します。関東支部会員の皆様におかれましては、何卒深いご理解とこれまで以上のご協力を賜りますよう御願い申し上げます。

第 10 回関東支部大会報告

支部大会運営委員長

新井巧磨（早稲田大学）

JACET 関東支部第 10 回記念大会が、「ヨーロッパの域を超えた CLIL の可能性を求めて（Exploring the Potential of CLIL Beyond Europe）」を大会テーマとし、7 月 3 日（日）に、

早稲田大学早稲田キャンパスにて開催されました。

基調講演には Dr. Margaret Gearon (Melbourne Graduate School of Education) と Dr. Russell Cross (同) をお迎えし、「Content and Language Integrated Learning (CLIL) Beyond Europe: An Innovative Pedagogy for Re-envisaging the Teaching and Learning of English in Japan」というテーマでお話して頂きました。

さらに、今回は「特別シンポジウム」を設け、両氏に加え、笹島茂先生（東洋英和女学院大学教授）、伊東弥香先生（東海大学准教授）にご登壇頂き、「Cases of CLIL Implementation in Non-European Contexts CLIL」と題しまして、CLIL の概要から日本・海外での実践や動向などについて解説して頂きました。

一方、全体シンポジウムでは「大学英語教育の現状と課題（Current Condition and Challenges for English Education in Universities）」という主題の下、田地野彰先生（京都大学教授）、寺内一先生（JACET 会長・高千穂大学教授）、村田久美子先生（早稲田大学教授）にお話して頂きました。

この他、CLIL 関連の研究発表や実践報告、賛助会員発表も多数行われ、そのうえ好天に恵まれたこともあり、300 名以上の方々にご参加頂くことができました。

来年度の支部大会はお休みとなりますが、代わりに国際大会が 2017 年 8 月 29 日から 31 日にかけて青山学院大学青山キャンパス（東京都渋谷区）にて開催される予定です。より大勢の方々にご来場頂き、より一層ご満足頂けるようなものにしていければと存じます。

以下は、各発表の後記です。司会の先生方にご執筆頂きました。ご協力に感謝申し上げます。

■研究発表・実践報告・ワークショップ■

#01. ワークショップ 09:30~10:35

小・中・高連携による CLIL の実践とその可能性
—公立小・中・高での検定教科書を使用した同一
テーマによる CLIL 実践を通じた英語教育連携—
Exploring the Potentials of CLIL through
Practices from Primary School to High School
in Japan

山野有紀 (宇都宮大学)

猿山真奈美 (栃木県立小山西高等学校)

櫻井光太郎 (高根沢町立阿久津中学校)

阿久津千聖 (宇都宮市立豊郷北小学校)

増渕由加里 (宇都宮市立横川中央小学校)

このワークショップでは、同一テーマ “Human rights” を通して行った CLIL の授業を紹介し、参加者が体験した。65 分で 4 つの授業を紹介し、それぞれの授業の一部を体験するといった時間的に大変タイトなものであったが、参加者の多くにとって有益なワークショップであり、会場がほぼ満員であったことなどから鑑みると、「小・中・高連携」「検定教科書」「CLIL」への関心の高さがうかがえた。(瀧口美佳・立正大学)

#02. 研究発表 10:40~11:10

高等学校の英語教育におけるデータ駆動型学習の効果

The Effects of Data-Driven Learning in the Senior High School Classroom

三輪一貴 (栃木県立日光明峰高等学校)

高等学校の英語授業でデータ駆動型学習 (DDL) の実践を行い、実験群と統制群で、DDL が学習者の文法能力および学習ストラテジーの使用にどう影響を及ぼすかの検証が行われた。実験群では、プリントを使い言語データを観察、グループでの話し合いを通し帰納的に言語規則を

学習した。その結果、学習後に、統制群よりも実験群の方が文法テストの平均点が有意に高くなり使用できる学習ストラテジーの数も増加していたことが報告された。

(川口恵子・芝浦工業大学)

#03. 研究発表 11:15~11:45

What is the Reason for Your Reason? Japanese Learners' Metalinguistic Use of “Reason”

Okugiri, Megumi (University of the Sacred Heart)

Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (Okugiri, Ijuin, & Komori, 2015) (一般公開) より選んだ母語話者と日本人による各 79 編のエッセー中の「reason」がどのような意味で使用されているかの分析が行われた。「reason」の使用頻度は日本人のエッセーの方が有意に高く、また、母語話者のエッセーでは「reason」が主に字義通りに使用されていたが、日本人では主にメタ言語的または指示的に使用されており、異なる特徴があることが報告された。(川口恵子・芝浦工業大学)

#04. 実践報告 09:30~10:00

弱型 CLIL アプローチでジェンダー問題を教える
Teaching about Gender Issues in the Soft CLIL Approach

吉原令子 (日本大学)

本発表では、大学英語教育環境下で弱型 CLIL の枠組みを用い、ジェンダー問題の 1 つである Domestic Violence をテーマに実践した授業例が報告された。発表者は授業実践例 (Pre-Activity, Reading, Video, Discussion, Essay Writing) を説明し、次に、この授業に参加した学生の感想を紹介した。本発表の中で、「ジェンダー問題を教える意義」や「一学期間を通しての授業の展開の

仕方」等の質問が参加者から挙がった。

(飯田敦史・群馬大学)

#05. 実践報告 10:05～10:35

Collaborative CLIL Classes with Overseas Universities

Kane, Eleanor (The University of Shimane)

本発表では、日本人大学生と海外の大学生によるオンライン上での協働学習を取り入れた内容重視型の授業実践が報告された。発表者は、授業実践の視点から、連携大学の見つけ方、コミュニケーションを図る上での適切なアプリケーションの選び方、実際に授業で使用した課題等を紹介した後、このプロジェクトに参加した日本人・アメリカ人両大学生の感想を示した。本発表の中で、このプロジェクトを運用する上での予算・準備期間等の質問が参加者から挙がった。

(飯田敦史・群馬大学)

#06. 研究発表 10:40～11:10

CLIL: On Multiliteracies and MLT

Joff P.N., Bradley (Teikyo University)

この発表では、クリティカルシンキング、アクティブラーニングそして反転授業を融合させることを目的とした CLIL 授業のためにデザインされた革新的モデルが提案された。学習者は、出来事が時系列順には並べられていないポストモダンの映画を視聴してその映画を「解読する」(decode)するという実践を通じ、記号論(semiotics)的にその映画が表現しているナラティブを解読することを学ぶ。この実践を通じて、学習者の意欲、言語への意識そして言語スキル向上に明確な効果が得られる、と発表者は論じた。

(大矢政徳・目白大学)

#07. 実践報告 11:15～11:45

The Foundation of CLIL: Practical Tips Based on MERRIER Approach for TETE

Yagi, Keita (International Christian University)

この発表では、高校教員向けのワークショップにおける Watanabe (1995) の提案した MERRIER Approach に基づく Teaching English through English (TETE) のための実践的な方法が報告された。MERRIER Approach とは、Watanabe (1995) によれば、Miming, Examples, Redundancy, Repetition, Interaction, Expansion,そして Rewarding を意味し、Krashen の Input hypothesis に基づくものであるとされている。当該ワークショップでは、参加者はまず MERRIER Approach の基礎的概念を理解したのち、Miming と Redundancy を融合させたアクティビティーに参加した。このアクティビティーは単に MERRIER Approach の応用としてだけでなく、英語を英語で効果的に教えることに対する意識を向上させる機会でもあった、と発表者は論じた。当発表では、当該ワークショップで行われたアクティビティーの一部が発表者と聴講者の一部とで実際に再現され、聴講者の理解が促された。

(大矢政徳・目白大学)

#08. 実践報告 09:30～10:00

能動的英語学習法—CLIL GLOBAL ISSUES を使用したサマリ・ライティング—

Active Learning in English Education: Summary Writings using CLIL GLOBAL ISSUES

村松美映子 (学習院大学・非常勤講師)

本発表は、大学1年生を対象に CLIL GLOBAL ISSUES を使って行った授業の実践報告である。受講者に自立学習を身に付けさせるべくグルー

ワークを有効に使い、様々なアクティビティに取り組むことにより、サマリ・ライティングの単語数やパラグラフ数の上昇ならびに内容面や構成面の充実が見られたとの報告がなされた。発表後には同じように試行錯誤しながら CLIL 授業を実施している参加者と意見が共有された。

(小屋多恵子・法政大学)

#09. 実践報告 10:05～10:35

Introduction to Financial Statement Analysis
(財務諸表分析入門) 大学学部での CLIL 展開事例

Introduction to Financial Statement Analysis:
A Case Study from an Undergraduate Program
in Tokyo

金子敦子 (武蔵野大学)

本発表は、大学3年生を対象にした会計入門授業の実践報告である。授業は EMI (English Medium Instruction) であり、発表者の長年の会計業務経験をもとに選択した教科書で基本を学び、企業で示されている実際の会計報告の分析考察を行っている。この授業に参加した後に、ゼミや卒業論文へとさらに実践を進め、卒業後の仕事に活かせる実践的な授業であることが質疑応答の時間に示された。(小屋多恵子・法政大学)

#10. 研究発表 10:40～11:10

An Investigation into the Effects of Output:
How Do Output Task Conditions Affect
Noticing?

Iwata, Yumiko (Hosei University; part-time)

The presentation gave an updated version on concepts of input, output and noticing by employing qualitative research. Three different tasks (text reconstruction, picture-cued guided writing, and L1/L2 translation) were used to

examine the effects of students' noticing of the target form. Findings show that each task has its strengths associated with noticing and understanding of the target form, such as picture-cued guided writing being a stronger task type, and text reconstruction combined with L1/L2 translation being a stronger task procedure. Implications include the importance of task selection to engage students' cognitive processing for higher levels of noticing and output.

(Reiko Takeda, Aoyama Gakuin University)

#11. 実践報告 11:15～11:45

Report on Research Writing Course on MMR

Fukuda, Tetsuya (International Christian
University)

This paper reported on a research writing course which the presenter taught in English. In 10 weeks (four 70-minute sessions per week), second year university students learned how to conduct mixed methods research on a topic of their choice and wrote their research in a 2,000-word final paper. The presenter outlined the steps taken in teaching mixed methods theory and quantitative/qualitative methods for analysis, combined with research and writing skills. The presenter's extensive undertaking with students, whose TOEFL score was around 400 the previous year, shows what students are capable of producing when teachers set high expectations for them.

(Reiko Takeda, Aoyama Gakuin University)

#12. 研究発表 09:30～10:00

実践的な英語力を育てる指導における教師の資質に関する研究

A Research on the Quality of Instructors Teaching Practical English

戸田博之 (東京大学・大学院生)

本研究では、大学のビジネス英語の授業での指導後、学生が書いた e-mail を 7 項目の評価基準で分析することで、大学の英語教員の背景の違いによる授業の効果に差があるかを検証した。大学でビジネス英語の需要が高まるにつれ、ビジネス経験が豊富な英語教員も増えており、今後はそれらの教員の知識や経験をどのように大学のビジネス英語指導に活用する方法を検討する必要性も含め、示唆の多い発表であった。

(武田礼子・青山学院大学)

#13. 研究発表 10:05~10:35

Teacher Training from the Perspective of Assessment Literacy

Tsuchihira, Taiko (Seitoku University)

Nakamura, Yuji (Keio University)

Miyazaki, Kei (Tokai University)

Chaikul, Rasami (Tamagawa University)

This presentation shed light on one of the shortcomings in language teacher education, which is language assessment training. The presenters introduced the language assessment workshops that they have been conducting for prospective English teachers. In these intensive workshops, the participants learn the process of test-making, test data analysis and teaching, through which they are exposed to the idea that assessment and teaching are two sides of the same coin and cannot be overlooked in language teacher training.

(Reiko Takeda, Aoyama Gakuin University)

#14. 研究発表 10:40~11:10

コア図式を使った指導の効果研究

Acquiring Perception Verbs by Using Core Schema-based Instruction

佐藤正伸 (大東文化大学・非常勤講師)

本発表は、大学生を対象にコア図式を用いた語彙指導と翻訳を使った語彙指導のどちらが有効であるかを比較検証した結果を報告したものである。コア図式を用いた語彙指導は英語の導入期に使用されることが多いが、ある程度学習が進んだ大学生を対象にした報告はあまり例がない。今回は look と see の知覚動詞を使った授業の効果が報告された。このような語彙知識の深さに焦点を当てた指導の効果を検証する更なる報告が期待される。

(小屋多恵子・法政大学)

#15. 研究発表 11:15~11:45

Longitudinal Changes in Vocabulary Size of Japanese High School Students

Kawashima, Tomoyuki (Gunma University)

本発表は、日本人高校生の英語の語彙サイズがどのように変化をしていくのかを 3 年間の長期に渡る変化を検証したものである。これまで縦断的研究の報告は少ないため、今回の報告は高校生の語彙数がどのように変化していくのかを知る貴重な報告であろう。どのような語彙テストを使用し、どのような分析方法が妥当かについては更なる報告が期待される。(小屋多恵子・法政大学)

#16. 実践報告 09:30~10:00

The Utility of Group Work with Language Consultants: A Longitudinal Study

Yamamoto, Hiroki (Meiji University; graduate student)

フィードバックは第二言語習得に効果的であるとされるが、教員によるフィードバックの機会

は限られる。この課題の1つの解決策として、辞書を用いつつ peer feedback をする Language Consultant (LC) と呼ばれる役割を設けたグループワークが実施された。その結果、学生がLCのフィードバックによって恩恵を受けると同時に、LC自身も知識を深めたこと、この活動を繰り返すことで学生のフィードバック能力が向上したことなど、複数の効果が報告された。

(藤尾美佐・東洋大学)

#17. 研究発表 10:05～10:35

Speaking Strategy Use and Speaking Proficiency Level of Japanese University Students

Zhou, Yujia (Tokyo University of Foreign Studies; part-time)

Inokawa, Mutsumi (Tokyo University of Foreign Studies)

Suzuki, Yoko (Tokyo University of Foreign Studies)

本発表では、大学生約100人を対象に実施した、スピーキング・ストラテジー（学習ストラテジーと言語使用のストラテジーの両者を含む）の使用と、スピーキング能力との関係についての研究報告がなされた。大学生（被験者）によく使用される、あるいは使用されないストラテジーが明らかにされたほか、いくつかの個々のストラテジーにおけるスピーキング能力間の有意差も報告され、示唆に富んだ発表がなされた。

(藤尾美佐・東洋大学)

#18. 実践報告 10:40～11:10

An Attempt to Facilitate Students' Active Learning by Using Smartphones and a Two-way Communication App

Kaneko, Asako (Tokyo University of Foreign Studies; part-time)

本発表では、リアルタイムにアンケート結果を知ることができるアプリ、imakikuを導入した授業実践が報告された。このアプリの導入により、学生が意見を間接的にクラスで発表でき、授業参加への意識が高まった。また、会場参加者が実際に sugukiku のサイトに行き、発表者のアンケートに回答する機会が設けられた。最後の質疑応答で発表者は、このアプリは直接的にアクティブ・ラーニングに寄与するものではないが、議論に積極的に関わろうとする学生の意識が高まり、それが楽しさにつながり、アクティブ・ラーニングを促す可能性があるとは指摘した。

(大和田和治・東京音楽大学)

#19. 実践報告 11:15～11:45

Simulation-based Language Education (SIMBLE)

Wright, David (Tokai University)

本発表では、simulation-based language education (SIMBLE) の概念の説明と実践報告があった。SIMBLE では、授業内で仮想世界を実現するためにコンピュータ・シミュレーションを活用する。発表者が実際に作成したシミュレーションは、飛行機のコックピットのような3スクリーンで構成され、iPad がコントローラーになっていた。発表者は、これを授業内で使うことにより、学生同士で操作方法等を教え合い、目標を設定し達成する過程において、学生の willingness to communicate が高まり、アクティブ・ラーニングが可能になると指摘した。

(大和田和治・東京音楽大学)

#20. 研究発表 09:30～10:00

PISA 型「読解力」育成のためのリーディング活動の研究—高校英語検定教科書の分析から—
How to Set Questions and Tasks to Nurture Reading Literacy of PISA: From Analyses of

鈴木広子 (東海大学)

平井清子 (北里大学)

OECD 学力調査 PISA の読解力は、テキストの情報の取り出し、解釈だけでなく、自らの知識や経験と結び付けて熟考・評価する能力までを含めている。本発表は、Communication English I, II の本文に関する質問・タスクについて、リーディング活動が熟考・評価するレベルまでの深い理解を学習者に導いている設計になっているかを分析した。その結果は、段階的に認知負荷の高いタスク (足場づくり) とさらに多くのインプットが必要であることを示唆した。

(河内山晶子・明星大学)

自律学習について、国内外での研究の背景、「自律」の概念などを詳しくご説明され、自律的に学習し成果を上げる学習者の様々なカタチについて、ご自身の調査結果から解説された。調査では、自律学習の先導的研究者である Benson の定義 (Benson, 2011) の 3 観点に基づき、英語学習における「自律性診断基準尺度」の暫定版を作成し、それらの妥当性の検証が行われた。高校 1, 2 年生 (118 名) を対象に行われた調査結果を基に、それらの基準尺度項目のご説明と「自律性の程度が高ければ高いほど、英語力が向上する傾向が高くなる」という結果のご説明があり、今後の学習支援のあり方についても示唆された。

(山本成代・創価女子短期大学)

#21. 研究発表 10:05~10:35

ラーニング・アナリティクスを活用した英文読解実験研究

An Experimental Study of Reading Processes within the Framework of Learning Analytics and Knowledge (LAK)

中野美知子 (早稲田大学)

本研究は Learning Analytics により、学習者の英文読解過程を可視化する実験を実施し、ページ遷移、ページ閲覧時間、辞書参照、音声等の履歴資料に基づき、英語力の異なる学習者の特徴を明らかにした。その結果、読解において理解力が高い学習者は、自ら読もうという意欲が高く、内容に関する背景知識があり、認知ストラテジーを効果的に使え、平均より少し早い時間で英文テキストを読んでいる学習者であることがわかった。

(河内山晶子・明星大学)

#23. 研究発表 11:15~11:45

動機づけの要因の強い学習者と、方略的要因群の強い学習者の比較

The Comparison Between Highly-Motivated Learners and High-Strategy-Use-Learners

河内山晶子 (明星大学)

自律的学習における学習者要因群 (動機づけ、情意、メタ認知方略、認知方略) の間の因果関係が、共分散構造分析で示されて学習過程がモデル化され、動機づけ的要因の強い学習者と方略的要因の高い学習者が比較された。するとメタ認知方略と認知方略の間の因果関係が、前者は強く後者は弱いという違いが見られた。前者は動機づけを源に自分に適した方略を編み出す工夫ができ、後者は動機づけの下支えもなく、方略を知識として外から得ていることが示唆された。

(山本成代・創価女子短期大学)

#22. 研究発表 10:40~11:10

自律した英語学習者再考

Autonomous English Learners Revisited

#28. 研究発表 14:35～15:05

CLILをめざす協働学習の試み
Aiming at CLIL through Collaborative Learning

津田ひろみ (明治大学・非常勤講師)

本研究では、大学1年生のリスニングの授業をCLILの観点から分析した発表がされた。遺伝子組み換え食品のテーマに沿って、CLILの4つのCであるContent, Communication, Community, Cognitionからの分析例が紹介された。従来、小学生の英語教育で使われていたCLILが大学の英語の授業でも応用でき、それによって学生の英語の授業に対するモチベーションも上がり、協働学習の効果が見られた。

(武田礼子・青山学院大学)

#29. 研究発表 15:10～15:40

Multiple Intelligences in a 'Soft' CLIL Classroom at the Japanese Tertiary Level

Yamauchi, Darlene (Toyo University)

This presentation is based on using Gardner's 8 Multiple Intelligences to design a tertiary level English CLIL classroom. The presenter introduced tools, such as the Multiple Intelligence inventory and Learning Skills Intelligences Matrix, which she utilizes to find out the needs of the English language learners. While the challenges that English teachers face in CLIL classrooms could be attributed to the fact that English teachers are not necessarily content area specialists, the results of the presenter's dynamic presentation indicate that CLIL can work with students in the tertiary level.

(Reiko Takeda, Aoyama Gakuin University)

#30. 研究発表 14:35～15:05

CLIL in Higher Education in Japan and Spain: Lecturers' Perceptions

Tsuchiya, Keiko (Tokai University)

CLIL is a growing area of both research and practice, especially in Europe and Asia. This study aims at examining how EMI-CLIL courses are introduced and implemented in Japanese and Spanish universities and how the CLIL lecturers in the contexts perceive its implementations. Interviews were conducted with five CLIL practitioners at universities in Japan and Spain in 2014-2015. The findings show that CLIL develops teaching skills and prompts curriculum reforms. CLIL also helps learners gain content knowledge including cognitive skills. Benefits of CLIL were shared while Spanish lecturers showed more engagement and positive attitudes toward CLIL than the Japanese lecturers.

(Sanae Saito, Tokai University)

#31. 研究発表 15:10～15:40

EFLとELF—企業CLIL研修から得られる教育的示唆—

EFL and ELF: Pedagogical Implications from an In-house CLIL Training

大津明子 (大東文化大学)

日本の建設会社に勤務するエンジニアおよび集中英語研修を担当する英語教員の英語に対する態度を把握するための調査の結果、内容理解と教員と学習者の意味の交渉に重点を置いている点からCLILアプローチをとる研修であることを指摘した。究極的には学習者がある場面でのように英語を使用するかを意識することが学習者中心の英語教育が要であることを強調した。

CLIL や当調査に関する質問や意見が交わされ、活発な質疑応答でむすんだ。

(斎藤早苗・東海大学)

#32. 研究発表 14:35～15:05

CLIL における他教科指導法の活用—美術科に焦点をあてて—

Application of Teaching Approaches of Other Subjects to CLIL: A Focus on Fine Arts

小野裕梨恵 (玉川大学・大学院生)

昨今の外国語教育において注目されている CLIL だが、外国語科の目標については触れられるものの、他教科の目標について触れられることはあまりない。そこで研究者は言語と親和性が高い指導法・アプローチとして、美術科の「B. 鑑賞」に着目し、言語活動を取り入れた美術鑑賞ストラテジーである Visual thinking strategies と Inquiry-based art viewing を用いた CLIL 授業を提案し、その手順について説明した。

(長田恵理・國學院大學)

#33. 研究発表 15:10～15:40

バスク自治州の中学生の CLIL 型学習に対する認識

Secondary Student Perception Towards CLIL in the Basque Autonomous Community

中西千春 (国立音楽大学)

バスク語とバスク文化の振興を目指した半官半民の ikastola に属する学校では、小学生は EFL として、中学 1, 2 年では Soft CLIL 型、3, 4 年では Hard CLIL 型学習で英語学習を行っている。中学 1 年生と 4 年生にアンケート調査を行った結果、「CLIL 型学習の効果は肯定的にとらえているが、英語以外の教科はできればバスク語で学びたい」と考える生徒の本音が垣間見られた。日本の教育現場に CLIL を導入するのであれば、学習者

の動機づけや科目教師と英語教師の連携などに配慮する必要がある。(長田恵理・國學院大學)

#34. 研究発表 14:35～15:05

インプット強化と学習、テキスト理解、熟達度の関係性

Input Enhancement, Learning, Comprehension, and Proficiency

目黒庸一 (神奈川県立希望ヶ丘高等学校)

本発表は、言語項目のインプット強化が学習者の気づきや理解度に与える影響を検証した研究である。英文テキスト中に含まれる 3 つのタイプの付加疑問文を、太字と大きめのフォントを使うことで視覚的にインプットを強化し、読解問題における理解度を測定した。「法助動詞→一般動詞→be 動詞・助動詞 have」と付加疑問文を徐々に難易度が増すように提示されたグループのみ事後テストにおいて統計的有意差あったことが示された。(武藤克彦・東洋英和女学院大学)

#35. 研究発表 15:10～15:40

学習者は「五」文型で文構造を捉えているか—英語母語話者と日本人熟達者との比較—

Do Japanese Learners of EFL Parse English Sentences According to “Five” Sentence Types?: Through Comparison with NSE and Proficient Learners

柳川浩三 (法政大学)

学習者の五文型の捉え方について、大学生を対象にした意識調査と診断テストの結果、およびその比較対象として英語母語話者と日本人英語熟達者の診断テスト結果を分析した研究である。診断テストの英文群について、英語教員のような英語熟達者は五文型に分類し文構造を捉える傾向があるが、中には別の構文として捉える項目もあることが示された。また母語話者は第 5 文型や第

1 文型を第 4 文型として認識する場合があることが示唆された。

(武藤克彦・東洋英和女学院大学)

#36. ワークショップ 14:35～15:40

基本語力を身につけるためのエクササイズ・デザイン

Designing Exercises for Developing Basic Lexical Competence

森本俊 (常磐大学)

吉原学 (東京経済大学)

語彙の指導については、その理解の深さ (depth) よりも大きさ (size) が優先されがちであり、多義語である基本語、特に基本動詞についてはその指導も簡単だと教師は思い込みがちである。しかし、本ワークショップでは、私たちのその思い込みを、豊富なエクササイズを通して上手に覆してくれた。学習者にどのように基本語を理解してもらうか、その効果的なエクササイズはどのように構築すべきかを学ぶ貴重な機会となった。

(田口悦男・大東文化大学)

#37. 研究発表 14:35～15:05

共通語として英語を使うにはどのようなスキルが必要か—日本人ビジネスパーソンの経験談から得られた教育への示唆—

A Study of Japanese Users of English as a Business Lingua Franca (BELF) and its Pedagogical Implications

瀧野みゆき (立教女学院短期大学)

日本人ビジネスパーソンの英語使用を English as a business lingua franca の理論的枠組みを、日本の大学英語教育に応用した意義深い研究であった。日本の英語教育の目的とコミュニケーションの意義も検討しながら、日本の大学生の「英語学習者」から「英語使用者」としての意識転換

の必要性についても語られ、英語教育への示唆に富んだ研究発表であった。

(奥切恵・聖心女子大学)

#38. 研究発表 15:10～15:40

EBP における英語プレゼンテーション指導の課題—英語教員とビジネスパーソンの評価観点の違いを生かすには?—

How to Incorporate Practical Opinions from Business into Instructions for English Business Presentations in EBP

藤尾美佐 (東洋大学)

English for Business Purposes の英語教育現場での意義は深く、とりわけビジネスに特化した英語プレゼンテーション大会での大学生の様子も含め、理論的に説得力のある発表であった。ビジネスパーソンはパフォーマンスやインパクト中心、英語教員は言語形式中心という評価の違いについてなど、統計的結果も示され説得力があり、大学のビジネス英語教育においてグローバル社会において示唆に富む発表であった。

(奥切恵・聖心女子大学)

第 1 回支部総会報告

支部事務局幹事

高木亜希子 (青山学院大学)

2016 年 7 月 3 日 (日) に、早稲田大学 8 号館 106 教室に於いて、2016 年度第 1 回支部総会が開催されました。支部総会では、2015 年度事業報告・会計報告、2016 年度事業計画についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。なお、会計報告は省略します。

■2015 年度事業報告■

I. 大会、セミナー等の開催 (1 号事業)

(1) 支部大会の開催

名称：2015 年度関東支部大会

日時：平成 27 (2015) 年 7 月 12 日 (日)

場所：青山学院大学

規模：約 390 名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET
関東支部共催講演会

場所：青山学院大学

規模：毎回約 30 名

日時と内容：

平成 27 年 4 月 11 日 (土) 高田智子 (明海大学)

「学校英語教育における CAN-DO リストの課題」

平成 27 年 9 月 12 日 (土) 杉本卓 (青山学院大学)

「教育に ICT を使う意味」

平成 27 年 10 月 10 日 (土) 清水公男 (文京学院大)
「再考：英語教育を通して育てたい学ぶ力とは何か？」

平成 27 年 12 月 12 日 (土) 山崎勝 (埼玉県立和光国際高等学校)
「CLIL と協調学習の現状と課題」

平成 28 年 1 月 9 日 (土) 下山幸成 (東洋学園大学)
「アクティブラーニングと ICT がもたらす英語教育のパラダイムシフト」

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

場所：青山学院大学

規模：毎回約 30 名

日時と内容：

平成 27 年 5 月 9 日 (土) 中田達也 (関西大学)
「効果的な第二言語語彙学習方法を目指して」

平成 27 年 6 月 13 日 (土) 柏木賀津子 (大阪教育大学)
「CLIL の理論と実践—フィンランド海外教育実習をとおして—」

平成 27 年 11 月 14 日 (土) 田中祥子 (東京大学大学院)
「夜間定時制高校生にとっての英語学習の意味：事例研究を通じた検討の試み」

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2 号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 3 号 (英語名：JACET-KANTO Journal)

日時：平成 28 (2016) 年 3 月 31 日

規模：約 1120 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 5・6 号

日時：①平成 27 (2015) 年 9 月 30 日

②平成 28 (2016) 年 3 月 31 日

※JACET 関東支ホームページに pdf で掲載

III. その他 (5 号事業)

(1) 支部総会の開催

名称：2015 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 27 (2015) 年 9 月 30 日

②平成 27 (2015) 年 11 月 14 日

場所：青山学院大学

目的：①2014 年度の支部の事業報告、会計報告
2015 年度の支部の事業計画

②2016 年度の支部の事業計画、予算案および人事案の審議

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 27 年 4 月 11 日、5 月 9 日、6 月 13 日、9 月 12 日、10 月 10 日、11 月 14 日、12 月 12 日 平成 28 年 1 月 9 日、3 月 12 日

場所：青山学院大学

■2016 年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催 (1 号事業)

(1) 支部大会の開催

名称：2016 年度関東支部大会

日時：平成 28 (2016) 年 7 月 3 日 (日)

場所：早稲田大学

規模：約 350 名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET

関東支部共催講演会

日時：平成 28（2016）年 4 月、9 月、10 月、12 月、平成 29（2017）年 1 月の 5 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 28（2016）年 5 月、6 月、11 月の 3 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行（2号事業）

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 4 号（英語名：JACET-KANTO Journal）

日時：平成 29（2017）年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 7・8 号

日時：①平成 28（2016）年 9 月 30 日

②平成 29（2017）年 3 月 31 日

目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行う。

※JACET 関東支部 HP に pdf で掲載

III. その他（5号事業）

(1) 支部総会の開催

名称：2016 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 28（2016）年 7 月 3 日

②平成 28（2016）年 11 月 12 日

場所：青山学院大学

目的：①2015 年度の関東支部の活動、会計報告、および 2016 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。社員選挙についての説明を行う。

②2017 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案の審議・承認を行う。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 28（2016）年 4 月、5 月、6 月、9 月、10 月、11 月、12 月、平成 29（2017）年 1 月、3 月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案を行う。

月例研究会報告

月例研究委員会委員長

山本成代（創価女子短期大学）

月例研究委員会副委員長

河内山晶子（明星大学）

■2016 年度上半期活動報告■

2016 年度上半期は、5 月、6 月の 2 回にわたって月例研究会を開催した。5 月 14 日に岡秀夫先生（元目白大学教授・東京大学名誉教授）、6 月 11 日に大井恭子先生（清泉女子大学教授）をお招きした。両先生のご発表とも大変内容の濃い充実したもので、どちらも 50 名近くの参加者があった。各先生方のご発表内容に関しては、後述の月例研究会報告を参照。

■2016年度下半期活動計画■

2016年度下半期は、11月12日に鳥飼玖美子先生（立教大学名誉教授）をお招きして、「＜グローバル人材育成＞政策が英語教育にもたらすもの」という題目でご発表をお願いします。青山学院大学にて16:00~17:20開催予定。

（山本成代・創価女子短期大学）

■月例研究会5月報告■

日時：2016年5月14日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）9階第16会議室

題目：「英語教育学研究：残された課題」

講師：岡秀夫（元目白大学教授 東京大学名誉教授）

講演は、英語教育学における課題として重要な3つの問いに答えていく形で進められた。まず「英語の知識があっても使えないのは日本人特有なのか？」では、日本人であっても環境さえ整えば、英語を第二外国語とする話者と同じレベルまで使えるようになることが実証的に示された。次に「テストの限界とは？」では、大学入試をはじめ立ち遅れている日本の現状が総括された。最後の「英語ができればグローバル人材と言えるのか？」では、Bachman, Okaの研究を引用し、テストの点数で表された表現力と、生きる力としての英語力のギャップを埋めるものとして、「ストラテジー」及び「世界の知識」が果たす役割が議論された。また、グローバル人材であるための必須条件と言える英語力の育成には、2つの意識改革が必要であることが強調された。意識改革のひとつめは、一人ひとりが社会的存在として、英語に限らず複数の言語でコミュニケーションを取ろうとするようになること、すなわち「複言語主義への意識改革」である。ふたつめは、「授業における意識改革」である。英語による授業を形骸化させることなく「わかる授業」として展開し、

わかったら次に「使ってみる授業」にすることである。そしてそのために重要なのは、教師の発問を工夫することである。発問・返答のやり取りの複雑さは、閉鎖的事実からメタ認知へと数段階のレベルがあるが、教師は学習者のレベルの実態を踏まえつつ発問を工夫することが求められるのである。日本人学習者はPISAにおいて批判的読解能力の低さを指摘されているが、英語による教師の発問が授業で改善されていくなれば、それも解決に向かうであろうと示唆された。

今回お招きした岡先生は、今年三月、四十余年の教育及び研究生活の後ご退職されたが、「自分たちが懸命に取り組んできた英語教育学研究の一部でもお話しすることが、今後の方々の研究と教育を活性化することに繋がれば」という願いを込めての講演承諾であった。まさにそのことが叶ったご講演であった。

（河内山晶子・明星大学）

■月例研究会6月報告■

日時：2015年6月11日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）10階第18会議室

題目：『中・高・大をつなぐ「思考力・判断力・表現力」を育むライティング指導』

講師：大井恭子（清泉女子大学）

講演はまず、学習指導要領を振り返り、日本の英作文教育の変遷をたどることから始まった。その後、講演者が実施してきた、中学校、高等学校、大学における研究事例が紹介された。いずれも学習指導要領がうたう能力及び将来的に望まれる能力の育成を目指してパラグラフ・ライティングの指導を試みた先駆的研究で、しかも教育効果を伴った実践であった。このような研究の礎の下に本講演がメイン・メッセージとして強調したのは、論証力（Argumentation 考える力）の育成であった。Argumentationとは「根拠によってサポー

トされた論理的アイディアのつながり」で、誰もが身につけるべき力である。Argumentation のモデルとして紹介されたのが Toulmin Model である。これは「自分の意見を持ち、それをサポートする理由づけを探し、理由づけを強固にする裏付けを探す」という Argumentation の流れが、CLAIM, WARRANT, BACKING の概念用語を使って、視覚的に示されたモデルである。このような「論理で説得する力」は、英語ライティングで鍛えることができると考えられる。英語の文章構成を学ぶと、英文を特徴づけている階層的特徴、結束性、論理的一貫性に触れることとなるためである。実際学生からも「日本語でのレポートも論理的に書けるようになった」というようなコメントが多かったとの報告であった。この例は、マルチコンピテンス (Multi-competence) の考え方で論証力を身につけた例であると言える。従来の対照修辞学的なとらえ方での指導は、英語ライティングへの母語の影響が negative influence としてとらえられているのに対して、マルチコンピテンスの考え方では、「英語で学んだことが母語に転移し、母語がさらに豊かになる」という肯定的なとらえ方で、両言語間の相乗効果を目指している。最後に総括として、「現行指導要領に基づいた教科書で学んだ中学生は、自分の意見や考えを英語で表現する力をつけてきている」という点、「今後、英語表現Ⅰ、Ⅱでは、自分の言いたいことを文法形式に落とし込む力を補強するような学習を積み重ねながら、様々なジャンルの文章に触れ、考える力を養うべき」で「大学では論証力の涵養が必要である」点が述べられた。

(河内山晶子・明星大学)

青山学院英語教育研究センター・JACET

関東支部共催講演会報告

支部研究企画委員

辻りこ (神田外語大学)

支部研究企画委員

米山明日香 (青山学院大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会 (第1回) 報告■

日時：2016年4月9日 (土) 16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル (14号館) 9階第16会議室

題目：「教科書のデジタル化の今後：その可能性と課題」

講演者：山内豊 (東京国際大学)

文部科学省による『「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議』という有識者会議が2015年5月に設置されて以来、検定教科書のデジタル化に関して、多くの関心が寄せられている。そのような社会の関心が高まる中、本講演では、デジタル教科書を用いることによる学びの変容から、教師に求められている知識や指導力、そして今後のデジタル化によって浮かび上がる課題について、有識者会議での動向を踏まえながら、包括的にお話いただいた。

本講演では、教科書のデジタル化の背景には、媒体が紙からデジタルに移行していることや、タブレットや電子黒板の普及、そして学習観の変化や国家のIT戦略といったことが関連していると指摘された。また、教師用デジタル教科書の科目別販売数にも触れながら、2015年は、英語の科目は、数学や書写に次いで三番目に普及率が高いことが示された。上記に加え、授業内において、デジタル教科書を用いることで、教師の役割は、知識伝達の中心的存在から、学習支援者、授業デザイナー、実践的な研究者といった役割へと変化するということが示された。その教師の役割の変

化により、指導技術や授業でのアイデアも変化し、他者と共有しながら、質の高いものへと改善・発展も期待できるのではないかということが、具体的な事例と共に示唆された。一方、学校教育法や、義務教育では無償提供されるといった内容の無償措置法に関連することには、特に留意する必要がある、義務教育でのデジタル教科書の提供や、その普及をどのように実施するかが今後の課題として挙げられた。

質疑応答では、義務教育での無償提供についての質問や、紙の教科書をどうするのか、電子黒板の使用に関する研修の動向について等、活発な質問・議論が展開された。今後の英語教育において、学習中心のアクティブラーニングを促進しうる学びのツールとしてのデジタル化に関して、私たちは今後何をしなくてはいけないのか、短い時間ではありながら、深く考えさせられる講演でもあった。

(辻りこ・神田外語大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第2回）報告■

日時：2016年9月10日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学 14号館総研ビル 9階 第16会議室

題目：「理論と実践の間で：英語教職課程履修学生の体験と省察の往還を通して見えてきたこと」

講師：浅岡千利世（獨協大学）

本講演は、浅岡先生がロンドン大学(University College London)に提出された博士論文の内容を「理論と実践の間で：英語教職課程履修学生の体験と省察の往還を通して見えてきたこと」というタイトルでお話いただいたものである。

本研究のきっかけとしては、教職課程履修学生に対して、「どのようなものを提供すれば、どのように役立つか」に興味をもたれたことがあげら

れた。

次に、教員養成における現状の問題点としては、(1) 学部卒業時に身につけておくべき教師としての資質と能力が明文化されていないこと、(2) 理論と実践の乖離があり、イギリスやフィンランドと比べると、教職課程で学んだことを実践する場が少ないまま、教員になるという指摘があった。また、日本の教師文化のなかで、(1) 教室をうまく運営することが効果的な指導の鍵であるという「全体的な指導 (holistic teaching)」と、(2) 経験を通して教師が指導法を学習する「技としての指導 (teaching as craft)」が重要視されている点についても言及がなされた。

そこで、教員養成課程を持つ大学で、教員を目指す学生7名に対して、1年半にわたり、各学生に6回ずつのインタビューを行ったり、ジャーナルを書かせたりすることで、教員になる前にどのような内的・外的変化があったかについて「質的データ」の収集が行われた。

データ分析の結果、(1) 教科に関する科目で学んだことを活かし始め、観察 (observation) と模倣 (emulation) を行うようになったことから「教師から英語教師」への変化が見られたこと、(2) 教職に関する科目や実習中の指導教員の影響を受けるなど、議論 (discussion) などを通して「より良い全体的な指導ができる教員」へと変化することが見られたこと、(3) 教師であるとともに英語学習者であろうとする姿勢が見られるようになったこと、(4) 実習生同士から意見をもらい自分自身の指導を省察 (reflection) するなど、記録をとり始めたことで、学生自身に大きな変化があったとのことであった。

このように協力者7名の観察記録から、「理論 (theory)」と「実践 (practice)」の間のギャップは、4つの要素、「観察」、「模倣」、「議論」、「省察」を通して埋められていくという結論を導かれた。

これらを今後の教員養成に活かして行ければ

と締めくくられていた。

(米山明日香・青山学院大学)

支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長

伊東弥香 (東海大学)

紀要編集委員会では、2013 年度より「関東支部紀要 (JACET-KANTO Journal)」を年 1 回発行しています。本年度は第 4 号です (2017 年 3 月発行予定)。支部会員の研究活動を奨励し、研究の質向上に寄与するために、委員会メンバーで協力し合いながら、1 年間の作業を進めています。

本年度は、支部研究大会プログラムに「JACET-KANTO Journal Vol.4 Call for Papers」の案内を掲載し、4 月に第 3 号と一緒に支部会員に郵送しました。さらに、6 月に支部ウェブサイト「JACET-KANTO Journal Vol.4 Call for Papers」をアップし (<http://www.jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>)、紀要投稿のための詳細情報を公開しました (論文種別、審査評価項目、紀要で扱う主な専門分野、スケジュール、投稿規程、日本語テンプレート、英語テンプレート)。

7 月には、「査読システム (peer review system)」登録者の情報更新、および新規査読者の登録を行いました。本システムを通して、投稿者と査読者がお互いに学び合い、1 本でも多くの論文が発表されることを意図としています。また、登録依頼の際には、第 4 号発行の予定スケジュールをお知らせした上で、第 4 号の査読可能性の有無を事前に確認させていただいています。このひと手間を加えることで、応募原稿が届いた後、委員会メンバーによる査読者の選定作業の効率化を図ることが出来るようになりました。第 1 次審査は大学の夏期休業期間中に設定していますので、委員会では、査読者に審査時間を十分に取っ

ていただくことを心がけています。

第 4 号は、例年通り、7 月 20 日に応募原稿を締切り、査読者の選定を経て第 1 次審査 (8 月～9 月) が進行中です。今後、年内に審査 (10 月～12 月) を終了し、採択論文の編集・校正作業 (1 月～2 月) が続きます。

紀要編集委員会メンバー: 伊東弥香 (委員長)、今井光子、大野秀樹、長田恵理、小田眞幸 (副委員長)、熊澤孝昭、武田礼子、濱田彰、古家貴雄、星野由子、Chad Godfrey、Paul McBride (敬称略、50 音順)

事務局だより

支部事務局幹事

高木亜希子 (青山学院大学)

■2016 年度第 2 回支部総会開催のお知らせ■

下記のとおり、2016 年度第 2 回支部総会を開催いたします。出席が可能な会員の方は、皆さまご参加ください。

日時: 2016 年 11 月 12 日 (土) 15:20-15:50

場所: 青山学院大学 14 号館 (総研ビル) 9 階 第 16 会議室

議題: 2017 年度事業計画、予算案について

2017 年度支部人事について

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会及び月例研究会開催のお知らせ■

下記のとおり、共催講演会及び月例研究会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

(1) 2016 年度第 3 回共催講演会

日時: 2016 年 10 月 8 日 (土) 16:00-17:30

場所: 青山学院大学 14 号館 (総研ビル) 9 階 第 16 会議室

題目：「大学英語教育のグローライゼーション
--ELFプログラムの挑戦--」

講師：小田眞幸（玉川大学）

(2) 2016年度月例研究会（11月）

日時：2016年11月12日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学 14号館（総研ビル）9階 第
16会議室

題目：「＜グローバル人材育成＞政策が英語教育
にもたらすもの」

講師：鳥飼玖美子（立教大学名誉教授）

(3) 2016年度第4回共催講演会

日時：2016年12月10日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学 14号館（総研ビル）9階 第
16会議室

題目：未定

講師：菊地恵太（神奈川大学）

(4) 2016年度第5回共催講演会

日時：2016年1月21日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学 14号館（総研ビル）9階 第
16会議室

題目：未定

講師：米山明日香（青山学院大学）

■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀
要を確実にお届けするために、転居の際には、
JACET 本部事務局へ住所変更届けを提出してく
ださいますよう、どうぞよろしく願いいたしま
す。

JACET-Kanto Newsletter 第7号

発行日：2016年9月30日

発行者：JACET 関東支部（支部長 木村松雄）

編集者：佐野富士子、下山幸成

斎藤早苗、川口恵子

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内